

北設楽地方における伝承民謡の調査

藤 崎 文 夫

A Research on Traditional Folk Songs in the Kitashitara District

FUMIO FUJISAKI

は じ め に

愛知県、奥三河に位置する北設楽郡は、その殆んど即ち90%以上が山林で囲まれた山間部落であり、その境は美濃・信濃・遠江と三県に接し、木曾山脈が南下して、長野県下伊那郡から北設楽を包み、愛知の屋根と称せられる地帯で、古くは交通至難の辺境であり、他の地方との交流も稀で、天竜川の一部の水路や、険しい山路が物資輸送の唯一の道であった。文化の交流が容易でなかっただけに、その地域に古くから伝承された貴重な文化的遺産も大切に守られ伝えられたに違いない。しかし年を追うて交通事情も進み、近代化されるに従って、新しい文化の流入も始まり、生活様式も変わってきて、伝承の基盤が次第に失われていく今日は、かつてこの地の人々の中に生きていた数多くの民謡も、古老たちの生命と共に持ち去られる運命になってきている。古くから村の人々にうけつがれた民謡は、村の祭りに、毎日の仕事に、心の糧となり、生きる喜びとして歌われ、芸能というより、生活そのものであったであろうことを思うと、自然消滅で失いたくない貴重な遺産である。

こうした意味で、北設楽の地に民謡をたずね、数々の、しらべの中にこもる喜び、悲しみ、人情をさぐり、人々の生活の一端を知ることができたらと現地へ調査に出かけた。すでに愛知県教育委員会が昭和54、55年度に実施した¹⁾「民謡緊急調査(愛知の民謡)」の中に、北設楽地方も含まれており、又名古屋民族音楽研究会(代表 藤井知昭氏)の調査になる北設楽の民族音楽シリーズ(1)としての、盆唄の研究もあり、その他多くの人々による民謡調査もあるが、それらを調査の道しるべとして、北設楽郡六か町村を訪れ、直接町村の人々に接し、歌声に耳を傾け、話をきいて回ったので、一部を報告する。

方 法

北設楽郡六か町村(稲武町・設楽町・東栄町・津具村・豊根村・富山村)の各町村を訪ねて、古老の方を主に、3、4名乃至、15、6名の方に集まっていたり、個人宅へ行って、歌ってもらって録音し、関係する話をきいたことを中心に、教育委員会調査の録音テープ(愛知教育センターに保管)をコピーしたのもあり、それらを採譜して調べた。北設楽全地域を、くまなくまわることは不可能で、限られた場所だけのものになったが、他の人たちの調査されたものも資料として、できるだけ広きにわたるよう心がけた。

結果及び考察

各地域をたずね、調査にかかってみると、仕事や作業の中で歌った歌は、今仕事の形態・方法が変わって歌う機会が、ほとんどなく、盆踊りに歌いながら踊ったものは、現在レコードを使用するというので、伝承者が思いのほか少ない現状である。又一つの歌についても、地域によって（時によっては同じ場所であっても）ことばやふしに違いのある場合が多いことに気づく、元来民謡というものが、もとの歌として、はっきりした作詞、作曲があるわけではなく、自然発生的であり、正確な伝え方（楽譜のようなもの）もなく、歌う人の感じにより、伝播・伝承に変化があり、創作が加わることは、当然考えられることであるが、その変唱（Variante）の多いのに驚く。日本民族学でいわれる「遠方の一致、近隣の不一致」ということがこの場合にも、考えられるのでなからうか。複雑な旋律になると、こぶしの使い方は、一人一人差があり、个性的であるが、何れもが貴重な正調であり、職業的歌手によって歌われる、洗練された芸術的民謡ではきけない郷土色豊かな土の香りを感じる。

北設楽で歌われる民謡の主なもの、大きく二つの種類が考えられる。一つは労作うたであり一つは盆踊りうたである。

・労作うた		・盆踊りうた		・その他
田植えうた	柴刈りうた	おさま甚句	勘兵衛さま	子もりうた
柿むきうた	草刈りうた	やんさ	のおさ	花祭歌ぐら
綿つむぎうた	こびきうた	せしょう	十六	和賛
麦打ちうた	木出しのうた	とよい	数えうた	あわん鳥
茶つみうた	地づきうた	高い山	伊那ぶし	七草つみ歌
臼ひきうた	土づきうた	のと	しょんがいな	がいきの神
粉ひきうた	馬方ぶし	こらさ	おんたけ	鳥追いの歌
粉つき歌	秋ぶし	せっせ	八幡	障子あければ
粉すりうた	秋うた	すくいさ	津具音頭	座興のうた
もみすりうた	コイコイ節	よしこの	津具小唄	ドンド焼き歌
もみひきうた	マガイ節	せこせ	吉田おどり	
草取りうた		さんさ	根羽根	
		おんど	ヘイオイ	

以上ですべてではないと思うが、上記のような歌がよく歌われたようである。

歌われることばについては、いろいろ流用されることがあり、北設楽郡史民俗資料編にも、300余の歌詞をのせ、「ここに集めた歌詞は、何々歌とか、何々節などと名づけることはできない。盆踊りにはどの踊りにも適用できるし、また他の労働に関する唄の、どの節にも歌われる — 中略 — だから次に掲げる歌詞は、おさま甚句の節で歌えばおさま甚句になるし、さんさの節で歌えばさんさになるのである。したがって田植歌の節をつければ田植歌、柿むき歌の節をつければ、柿むき歌になるのである。しかしよくしたもので、自然にその時の、その場に適合する歌詞が選ばれて、歌われることは当然であろう」とあり、同じことばが、別の歌に出てくることがあり、はじめしばらくは、その歌にふさわしいことばで歌われるが、何番も続くうち、いろいろ他と共通な歌詞が歌われ、仕事や踊りの続く限り延々と歌われるのである。つぎに、労作うた、盆踊りうたの、何曲かをあげることにする。

地づきうた

地づきうた

♩ = ca. 60 稲武

こ - こは おう - ち の ノ ホイホイ
 だいこく は - - し ら - ヤレ こころ
 そろ - え - ての ホイホイ ついて
 く - れ おめでた や アレワイサ - アの
 すえはえ ばい トシコメドシコメ

美濃と三河の ノホイホイ
 境のさくら ヤレ
 根元ア三河で ノホイホイ
 枝は美濃 枝は美濃
 アレワイサノ 末繁昌
 ハア ドシコメドシコメ

めでためでたの ノホイホイ
 若松さまは ヤレ
 枝もさかえて ノホイホイ
 葉もしげる おめでたや
 アレワイサノ 末繁昌
 ハア ドシコメドシコメ

この歌は、北設楽地方のほとんどの場所でできかれ、所により、一部のことば、ふしまわしに、若干の差があるが、大体よくにている。ここには稲武町のものをあげる。新築家屋の普請のとき、土台石をすえるため、ついて固める祝いの歌である。歌詞はいろいろあり、上記の「めでためでたの……」という全国的に有名なことばは、いろいろの場合にも使われる。豊根村の清川信次氏によれば、かつて天竜川流域では堤防づくりに、松の木をかためていく地づきの時にも歌われたとのことである。津具村で土づきうたという名称も使われている。旋律は、e-cまでで、ほとんど1オクターブの音域で、大ぜい声を合わせて歌うに歌い易く、³⁾小泉文夫氏の音階論ではeとaを核音とするテトラコードを持つ民謡音階と考えられる。

田植えうた

田植えうた

♩ = ca. 60 豊根

ご - べ - づ - た - う え - て - - - そ の - ろく
 べ - づ - は - い ば - よ と - - - も - た - - ら -
 いせ - ま - い - - - り - いせ ま - い - り -
 い ば - よ と - - - も - た - - ら - い - せ - ま
 - い - - - り -

植えておくれよ 二もと三もと
 三もと三把に刈れるよに

植えておくれよ 四つ目にしゃんと
 ここは道ばた 人が見る

田植えするにも 降られちゃ困る
 様にふられちゃ なお困る

この田植えても わしゃ米食わぬ
 稲が穂に出りゃ わしも出る

稲は穂に出て すず花かけて
 ちょっと乱れて 思案する

田植え歌は、設楽地方でも歌われたが、北設楽地方一帯に山地が多く、米作の場所は限られて狭い、しかも、郡史で見ると⁴⁾「幕藩体制下の水稻栽培は貢租納入を目的としたもので、商品あるいは、農民の食事として考えられているのではない」とあるように、納めるための米作りに、わずかな土地を耕した、きびしい生活ぶりが想像される。この歌のある豊根地方も農業以外に生産作業がなく、「山づくり」といい焼あと農業で、雑穀、あわ・ひえ・豆が主で水田が少ない。津具は水田も多いが、豊根の者が津具へ行くと「豊根のいもくい」と、ひやかされたものだと言われた。しかし今では、田植え歌を歌う情景も姿を消し、設楽の名倉では、米作りをやめて、ビニールハウスでトマト栽培のご時世になってしまった。この旋律もb-bの1オクターブの音域の民謡音階で、親しみやすい、大ぜいで歌いやすいものである。

津具 馬方ぶし

津具

こころは おりも ----- と -- エ
 くだれば ----- つい -----
 はみさ やな ぶ ----- に ----- エ
 -- なが ----- みえる -----
 つぐも はなつ だらで ----- ありもと -----
 ----- のほ -----
 ちやで よあけ ----- の ----- エ
 エ ちよ ----- なく -----

津具 馬方ぶし

ここは折元 下れば津具よ
並木柳に ひが見えるよ

津具を七つ立ちで 折元上りゃよ
茶屋で夜明けのちよぼがなくよ

津具地方にのみ聞かれる馬子歌であり、伝承者も現在、高木友三郎氏のみであるという貴重なものである。郡史によれば⁵⁾「信州地方の農民の駄賃稼ぎから発達したといわれる中馬は海に恵まれることのない信州を中心とした内陸地方には不可欠な駄馬搬送機関であった。ことに信州飯田と東海道筋の名古屋・岡崎、あるいは新城・吉田（豊橋）方面とを往復した中馬は山国の特産物を移出し、塩を始め海産物・陶磁器・木綿などの生産物資移入のための輸送機関として極めて重要な位置を占めていたのである」。津具村は飯田街道の途中にあり、中馬の活動の拠点として活発であったが、街道を往来する馬

子たちに歌いつがれた歌である。現在は道路の整備、近代的交通機関の発達によって、馬方ぶしも消え忘れられていく運命である。長野県の馬子歌に影響されたと考えられる旋律で、典型的な民謡音階であるが、細かいこぶしが馬子歌の特徴をよく表わし、折元峠から津具へと山道に馬をひく、のどかなしらが、哀愁さえ帯びて人の心に迫る。

なお、小田木村に、馬追いうたとして残る次の歌は、実際に歌われるのを聞いたのではないので、旋律はわからないが、おそらく、この馬方ぶしと同じように歌われたのでなからうか。

- 腹が松原で折元峠
津具へ下りなきゃ
まま食べぬ
- 馬はやせ馬重荷に小づけ
案じられます
山坂を
- 三州道すじまぐその中に
あやめ咲くとは
しおらしや
- 馬は三つ追い馬方一人
案じまするよ
谷川を
- よくも染めたよ馬喰さの浴衣
肩にかけ馬
すそくり毛
- 酒によったよった
5勺の酒に
一合飲んだら 由良の助

茶 つみ うた

茶つみうた

東 栄

A

うらも これから どうらく やめてさ
わらでかみ 巾てしんぼ せろ

B

しんぼ なされよ しんぼは おねだる
しんぼせろ きりかねお ば ろ

文の上書きゃ うす字で書いてさ
中にゃしばらく待とある
橋はらんかん 腰うちかけてさ
月の明かりで文をよむ
あいた見たさは とびたつ様なさ
かごの鳥かよ うらめしや
五里の道のり 三里は送るわ
あとの二里をばお静かに

東栄町は昔から、茶の産地として知られているが、この歌の伝承者、尾林れん氏（92歳）は、幼い頃より茶畑で茶つみうたを歌いながら、茶つみをした経験者であり、現在は息子さんが表屋園という製茶舗を営んで居られる。れん氏から30に余る歌詞で歌われるのを聞いたが大体、A、Bという二つのタイプに分かれ、さらに歌詞の抑揚によって細かい部分に、変化が聞かれた。同じ人が、一つの旋律で変唱部分のあることは、民謡旋律の自由さを知った。津具・豊根でも、現在自家用に茶を作っているようだが、茶つみうたは東栄町以外聞かれなかった。

臼 ひきうた

(もみすりうた)

臼ひきうた (もみすりうた)

東 栄

こいいうす ひ-き - した くも
ば い- が あすの茶の この
あ て- が ば- い

臼の軽さよ 相手のよさよ
相手変るな あすの夜も

茶つみうた

お茶をつむなら 根葉からおつみ
うらの新芽は だれもつむ

東栄町で、臼ひきうたとか臼すりうた、と言われ、豊根、津具でも伝承されているが、同じ旋律で、茶つみうたとして東栄町で聞いた。一つのふしがあり、多くの歌詞があれば、流用自

在という面が、うかがわれる。この旋律は民謡に多い³⁾テトラコルド (Tetrachord) 型で、核音は d と g である。

粉つきうた

粉つきうた

豊根

今日はよい日だ みずえのたつで
棟をつつんで 粉をつく

これのお家には 榎の木がござる
榎の実ならせて 金になる

めでためでたが 三つ重なりて
鶴がごもんに 巣をかけた

鶴がごもんに 何というてかけた
お家繁昌と いうてかけた

この歌は北設楽では、他の地方で聞けなかったが、こうした作業と歌は他の地域にもあったと思われる⁶⁾「この歌は農作業の繁栄を祈る時に歌われる歌である。生のもち米で団子をつき、団子ができあがると、更に臼に水を加えて、白くべとべとになった米を集まった人々になすりつけてさわぐ。なお、この臼は大黒柱のわきにすえられる」といわれ、五穀のみのりを祈り豊稔を祝う時に大ぜいで歌われたようである。音域は c-d の 9 度、c-g のペンタルコルドの上に、g-c のテトラコルドを結合したもので、³⁾正格旋法型であり、都節音階 (陰の音階) によってできている。

木びきうた

木びきうた

稲武

大工さんかわいや
木びきさんにくや
仲のよう木を ひきはなす

両手合わせて
片ひざついて
人の気をひく こびきさん

この歌は、稲武地方のものであるが、郡史によれば、⁷⁾近世初期には、天然林はむしろ豊富であったし、御用材の伐出は田嶺村の村役場で行っ

ても、その杣等は 1 人 1 日米 3 升という日当であったから、どちらかといえば、御用材の伐出を農民も農閑渡世として歓迎する理由があったということで、木びきの仕事をする者も多く何人か組になって働き、この歌を歌いながら仕事をしたものと思われる。今そうした風景は全く見られない。

以下、盆踊りのうたについて考察する。

北設楽地方では、どこの町村においても、盆行事と盆踊りが盛んであり、古くからの形態で伝承され、昔から村の人々の大切な行事であると同時に又楽しい催しであったと思われる。最も小さい村の富山村は、天竜川の流に臨む急傾斜の山地であるが、年間最も大きい行事が盆踊りであり、村中の人々が集まって踊りを楽しむ。若者たちは、それだけであき足らず、長野県下伊那の新野まで踊りに出かけるのだと富山村漆島の古老から聞いた。

現在では、レコードが多く使われ、新民謡とか、〇〇音頭とか現代的なものも入ってきたが昔のままの盆踊り歌もきかれるとのことで、それだけに伝承者も、労作のうたに比べて多いことが、うなずかれる。

東栄町下川盆踊り保存会の説明によれば、盆踊りは現在レクリエーションの意味が強いが、本来は盆に来るといふ先祖の霊や、三界万霊を弔い、それらの霊を鎮送するために踊るものであったとのことで、盆が終ると次の年まで踊ることができないというきまりもあったようである。

おさま甚句

おさま甚句

東 栄

♩ = ca 60

Solo

お-さま じん くは どこ- から- ほよ

Chorus

に さ-ん(ゆふ)り- くま- お-さま しも-

Solo

だ-か-ら ア コリヤ- しも- だ-か-ら

伊豆の下田ときいてはきたが、
どこが伊豆やらおさま下田やら

伊豆の下田に長居はおやめ
しまの財布がおさまからになる

盆にゃおいでよ7月あおいで
死んだ仏もおさま盆にゃくる

盆だ盆だと若い衆が待ちる
今宵盆だにおさま出て踊れ

おどれ若い衆おどらにゃ帰れ
庭の狭いがおさまじゃまになる

豊 根

お-さま じん く-は... どこ- から- ほよ-

に さ-ん(ゆふ)り- くま- お-さま しも-

だ-か-ら... とこ- から- ほよ- た

さ-ん(ゆふ)り- くま- お-さま しも- だ-か-ら

おさまは、オッサマであり和尚様のことを指す。東栄町の歌の文句はお僧様とある。永正年間伊豆の国、下田から、東栄町大字下田へ来て、長養院を開いた光国和尚舜玉が、仏教を広めるため、盆供養の念仏踊りとして始めたとの説があり、長野県

の新野に瑞光院を建立するに当り、東栄町下田から人足をつれて行って建築工事をしたが、その人足たちが新野で踊ったのが、おさま甚句の始まりとも言われる。曲は東栄町のもとの豊根のものをあげたが、東栄町のは、はじめ音頭取りが一人で最初の句を歌ったあと、続いて音頭取り以外全員で歌う形態で、実際の盆踊りの原形であり、豊根は通して一人で歌っている。豊

根のは、細かいふし回しで、こぶしをきかせ歌い手の感情をよく表出している。おさま甚句は北設楽のどの地域でも好んで歌われ、盆踊りに欠かせない歌のようである。東栄町の曲では、eとaが核音、豊根村のではgとcを核音とし、共にテトラコルド型の民謡音階と考えられる。

すくいさ

豊根



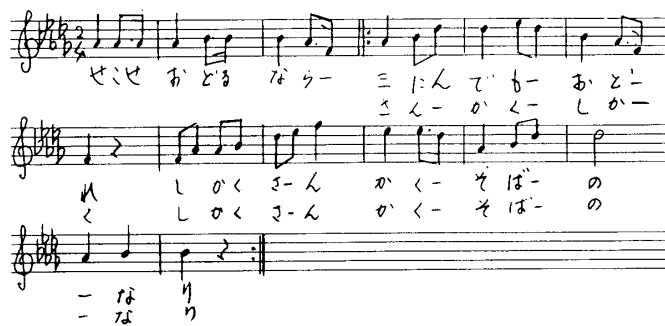
すくいさ

豊根地方のものを採譜した。

柳田国男氏の信州随筆に書かれている「新野の盆踊」の附記に⁸⁾「新野でもう忘れかけて居る古風の踊の一つに、スクイサというのが特に注意せられる。此踊の名の起り、ひだるけりゃこそスクイサに来たに、入れてたもれよーすくひ……」とあり、「下の句が、たんと溜れよーすくいとなって伝っている」と書かれている。柳田氏は、スクイサは飢饉年の救助小屋のこととしか思われないと記しているが、踊りは扇を持って、物をすくう手ぶりをやるから、この名が起ったという説もある。

せこそ

富山



せこそ

盆よ盆よと 春から待ちる

盆が過ぎたら なによ待ちる

そろたそろたよ 踊り子がそろた

稲の出穂よりゃ まだそろた

歌いなされよ お歌いなされ

歌でござりよが さがりゃせぬ

古くから、富山村に盆踊り歌として伝承されている、隣の長野県新野でも行われているというが、関連ははっきりしない。もちろん北設楽の他の地域で聞かれないが、富山村でも、現在は、レコードに歌を入れたものを使用しているとのことである。□と□のリズムは、歌のことばによって、自由に入れかわり、一定していない。比較的高い音域で歌われるが、f-fまでの1オクターブで、e sとbを核音とする民謡音階である。

富山村では、労作の歌は採集できず、盆踊りの歌及びわずかの、わらべうたであった。盆踊りのうたとして昔から歌いつがれているものに「のおさ」があり、新野にも歌われているよう

だが、北設楽郡にありながら、他の交流と言えば、長野県や静岡県の方が近く、富山村のおおぞれ（大嵐）駅の一つ南の駅は「みさくぼ（水窪）」で静岡県であり、山の中の大きい駅で、富山村の人は、そこまで買い出しに行く事多く、民謡も長野、静岡両県の影響が考えられる。

ほちまん

はちまん

豊根

他の地方からの伝播が考えられるものとして、「チョイナ節」「のと」「おんたけ」「伊那節」「はちまん」等がある。「チョイナ節」は「チョイナチョイナはどこからはよた…」と草津節が発祥の地ではないかと思われ、「のと」は長野県の新野の盆踊りに有名であるが、昔能登半島方面から、ウルシの木を求めて来た人たちに教えられたと言われる。「木曾のおんたけ夏でも寒い……」と歌

われる「おんたけ」は、木曾節ともとを同じくし、「伊那節」は、歌詞、旋律がそのまま伝承されているようである。

ここにあげた「はちまん」は、郡上節の「郡上の八幡出て行くときは……」と歌い出される岐阜県のそれと、同じ文句を持ち、その関連を考えられる。しかし旋律の方は、岐阜郡上節と全く異なり、個有の哀調を帯びている、北設楽で豊根のみで、他で歌われていないようで、

⁹⁾ 盆唄集の中にも、豊根村以外に分布地が見られない。豊根村のみに伝承される盆踊り歌という貴重な存在である。旋律構造は、a 及び上、下の e を核音とする ³⁾ プラガル旋法型 (plagal mode) と思われるが、12小節目に現われる f の音が、極めて印象的である。

おわりに

北設楽郡に伝承されている民謡の一部について報告したが、現地へ赴き調査をしてみて感じたことは、北設楽地方は民謡の宝庫 ということである。六か町村、どこを訪ねても「労作の歌」「盆踊りの歌」の数々に心うつ調べを聞くことができた。

盆踊りの歌については、盆唄集のレコードと楽譜がすでに紹介されているので、同じ旋律のものは重複をさけたために、曲数が僅かであるが、現在、北設楽の各地で聞ける民謡の大半は盆踊りの歌で、「はちまん」始め 2、3 曲以外は、どこでも伝承され、踊られている。

労作の歌については、昔と今との仕事そのものが変わっているため、伝承されているものが少なく、古いものをすべて聞くことができないのが残念であるが、おそらく過去には、もっと多くのものがあり、単調な仕事も歌によってはかどり、長い時間の作業も続けられたであろうことは、想像に難くない。

歌の文句の多くは、ほとんどが 7・7・7・5 調で、一つのふしがあればどれにあてはめても歌うことができ、作業や踊りの続くかぎり、歌うことばにも困らないというのが、民謡の性格であろう。曲はごく一部の陰の音階（都ぶし）を除いて、陽の音階（民謡音階）であり、素朴な農村生活を歌う明るいものが多い。

これからさらに、広く調査と考察を進めるにあたって、子どもの「わらべうた」についても
伝承・伝播を考えていきたい。

参 考 文 献

- 1) 愛知県教育委員会：愛知の民謡 (1981)
- 2) 北設楽郡史編纂委員会：北設楽郡史 民俗資料編 447—456 昭45
- 3) 小泉文夫：日本伝統音楽の研究
- 4) 北設楽郡史編纂委員会：北設楽郡史 歴史編—近世 91 昭45
- 5) “ “ “ 198 “
- 6) 愛知県教育委員会：愛知の民謡 261 (1981)
- 7) 北設楽郡史編纂委員会：北設楽郡史 歴史編—近世 151 昭45
- 8) 柳田国男：柳田国男集 22 信州随筆 300 築摩書房 (1962)
- 9) 長坂一雄：日本民謡全集 3 関東・中部編 雄山閣 昭50
- 10) 稲武教育委員会：稲武のうた (1981)